大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

# ピエール・ボエスチュオー研究（２）『人間の優越と尊厳に関する小論』



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2015-04-15<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 鍛治, 義弘<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.24729/00006045 |

# ピエール・ボエスチュオー研究

## （２）『人間の優越と尊厳に関する小論』

鍛　治　義　弘

『人間の優越と尊厳に関する小論』*Bref Discours de l'Excellence et Dignité de l'Homme* は、ピエール・ボエスチュオーの第三作であり、『世界劇場』*Le Théâtre du Monde* にすぐ続いて1558年に出版され、両者は共通した特認を持っていた。1558年のセルトナ Vincent Sertnas の初版に続き同年ロビノ Gilles Robinot、ロンジスとロベール・ル・マニエ J.Longis et Robert le Mangnier からも発刊され、1559年にロビノ、1560年にロビノ、ロンジス、ロベール・ル・マニエから上木された後[1)]、1561年に『世界劇場』との合本がセルトナから上梓されると、その後16世紀の間この合本の形で多くの版が刊行された[2)]。こうした刊行回数は『世界劇場』の成功によるところが大きいと思われるが、1585年にポワスノ Bénigne Poissenot の、1589年にキュイペル Laurent Cuyper のラテン語訳が出された[3)]ことを見るならば、この作品自身もかなり広く受け入れられたことが分る。『世界劇場』と間をおかずに刊行するためか、急いで制作、印刷された節も見て取れる[4)]。

人間の尊厳はとりわけルネサンス的テーマであり、イタリアに関しては、クリステラーが概観したように[5)]、ファツィオ、マネッティ、フィチーノ、ピコ・デッラ・ミランドラ、ポンポナッ

---

1) Boaistuau, *Bref Discours de l'Excellence et Dignité de l'Homme*, Édition critique par Michel Simonin, Droz, 1982, p.27.

2) Boaistuau, *Le Théâtre du Monde*, Édition critique par Michel Simonin, Droz, 1981, pp.27-28.

3) M.Simonin, Introduction au *Bref Discours de l'Excellence et Dignité de l'Homme*, Édition critique par Michel Simonin, Droz, 1982, p.13.

4) 例えば次の文のように、カルダーノの『精妙さについて』のフランス語訳を引き写しながら、中途半端な訂正を行っている。<<[... ]la face : en laquelle dependent deulx merveilles. Le premier, qu'entre tous les hommes presque infinitz, tous sont si differens par tant petite espace de la face humaine, [ ... ]. La seconde, que nature a faict au corps humain en tant petite partie [ ... ]>>（強調は論者）Boaistuau, *Bref Discours de l'Excellence et Dignité de l'Homme*, Édition critique par Michel Simonin, Droz, 1982, p.52。以下本論文での『人間の優越と尊厳に関する小論』への言及はこの版により、*BD* と略称する。

Cf. Cardan, *De la Subtilité*, trad. de Richard le Blanc, Paris, Guillaume le Noir, 1556, f. 252 v°,（参照したのはリヨン市立図書館所蔵版）。<<[ ... ] la face : de laquelle dependent deux merveilles : le premier, qu'entre les hommes presque infinis tous sont differents par tant petit espace de la face humaine, [ ... ] : le second est, que nature a fait au cors humain, en tant petite partie tant [ ... ] >>（強調は論者、略字記号は現代語の書法をもとに文字化した。以下同様）。なおシモナンの参照した 1642 年版とは異なり、この翻訳では<<dependent>>と正しい形が使われている。また本論文での *BD* の典拠への言及は、シモナンの校訂版の注での貴重な指摘によるが、カルダーノの『精妙さについて』のフランス語訳については、今述べたようにシモナンが参照しなかった版を参照することができたので、シモナンの僅かながらの指摘の誤りを挙げておくことも無駄ではあるまい。*BD*, p.115, note74. 1642 年版の<<Mennon>>のつづりは 1556 年版では<<Memnon>> (Cardan, *De la Subtilité*, trad. de Richard le Blanc, Paris, Guillaume le Noir, 1556, f.324 r°)。さらに *BD*, p.116, note79 と note80 でシモナンの挙げている引用はプリニウスのフランス語訳の文であり、『精妙さについて』のフランス語訳では以下の通り。<<comme l'Iliade d'Homere ecrite à vne carte qui estoit comprise dedens l'ecorce d'vne noix : vne nauire d'yuoire qu'vne petite mouche à miel cacheroit de ses ailes.>> (Cardan, *De la Subtilité*, trad. de Richard le Blanc, Paris, Guillaume le Noir, 1556, f.324 r°).

5) Paul Oskar Kristeller, *Renaissance Thought and its Sources*, Columbia University Press, 1979, <9. The Dignity of

ツィなどがこの人間の優越と尊厳を主題化していた。またフランスでは、ソッツィが述べるごとく[6]、モーリス・セーヴなどが人間の優越と尊厳に関して様々な主題で触れており、その典拠たる古代教父たちの論が幾つも出版されていた。こうした背景の中で、ボエスチュオーの論はどのようなものか、まずはその内容を概観しておこう。

ボエスチュオーのこの論は、現代の私たちからすれば、明確な構成があるとは思われず、紆余曲折している感を否めないが、末尾の目次、欄外注をも参考にしながら展開を追ってみよう。

本論の前に置かれた、スコットランド貴族、ジャックとアレクサンダーの二人のビートンへの献辞が導入の役割を果たし、前作『世界劇場』で「人間の悲惨を嘆い」た後に、「人間の優越と尊厳を示したいと思った」との意図が述べられ、「他の哲学的論よりも、著名な幾人ものより多くの記憶すべき例と英雄的事蹟で飾った論」と方法が明らかにされる[7]。

本論は神による人間の創造から説き起こされ、人間の本性がマネッティ Giannozzo Manetti（1396−1459）の『人間の尊厳と優越について』とキュロスのテオドレトス Théodorète de Cyr（393−457）の『人間の本性について』のロラン・ピエートルによるフランス語訳を引き写す形で示される。まず第一に神の似姿としての人間が述べられる。

「神は自分の傑作に手を付けられた。そしてそのとき、わたしたちの似姿似ているものとして人間を作ろう、海の魚、空の鳥、地上で動くあらゆる種類の獣と蛇を支配するようにだ、と言われた。」[8]

こうして神はこの世界に含まれるすべてのものの主人たるべく人間を創造したが、人間がこの宇宙の作者を賛嘆し、神がどのような恩恵を人間に与えたかを認識するためであった、と言う。

他の被造物に比べて人間の創造はもう一つの特異な点があり、それは、神の霊気により、魂を入れるために肉体を別に作ったことであるとして、霊魂論へと論は進む。ブリュエの『新アカデミア派に対する対話』[9]の論を要約する形で、古代からの哲学者の霊魂についての意見を概観し

---

Man>, pp.169-181.

[6] Lionello Sozzi, <<La <Dignitas hominis> dans la littérature française de la Renaissance>>, in A.H.T.Levi (edited), *Humanism in France at the end of Middle Ages and in the early Renaissance*, Manchester University Press, 1970, pp.176-198; <<La “Dignitas hominis’’ chez les autheurs lyonnais du XVIe siècle>>, in *Actes du colloque sur L’humanisme lyonnais au XVIe siècle*, Presses Universitaires de Grenoble, 1974, pp.295-338.

[7] *BD*, p.35, <<après avoir déploré [...] les miseres humaines>>, p.36.<<j’ai voulu monstrer son excellence et dignité>>, <<traicté [...], lequel j’ai plus enrichi d’exemples memorables et faictz heroiques de plusieurs personnes illustres, que d’autres discours philosophiques>>.

[8] *BD*, p.39.<<il mettoit la main à son chef d’œuvre. Et lors il dist, Faisons l’homme à nostre image et semblance, et qu’il ait domination sur les poissons de la mer, sur les oiseaux du ciel, et sur toutes les bestes et reptiles qui se mouvent sur la terre.>>

Cf. Giannozzo Manetti,*Ianotii Manetti De Dignitate et Excellentia hominis*, edidit Elizabeth R. Leonard, Patavii, Aedibus Antenoreis, 1975, p.86.<< <Facimus>, inquit, <hominem ad imaginem et similtudinem nostram, ut presit piscibus maris et volatibus celi et bestiis terre universeque creature omnibusque reptibus que movetur in terra.> >>（「われわれの形に、われわれの似姿に人を作る、海の魚、空の鳥、地のあらゆる獣とすべての被造物、地で動く蛇を指揮するためだ」と言った。） 「創世記」、I, 26.も参照。

[9] Guy de Bruès, *Dialogues (…) contre les nouveaux Academiciens*, Paris, Guillaume Cavellas et André Wechel, 1557.

た後、ボエスチュオーは、自分たちがキリスト教徒であるという理由だけで次のようなキュロスのテオドレトスの著書で表明されている意見を信じると告げる。

「しかしキリスト教徒で［...］あるわたしたちは、わたしたちの神が人間を土で創造された後、人間の顔に命の息吹を吹き入れられ、人間は生きた魂として作られたと信じる。そしてこの霊気は、神の口から出たあるいはそれに由来する、空気の何らかの吹き込み、揺らぎ、あるいは流れであったと理解すべきでない。というのは霊気は単一であり、いかなる合成あるいは混合もないから。モーセが世界の創造の書で書いたように、霊魂は理性そして知性に飾られた息吹である。」[10)]

こうした霊魂を持つ人間は、地上的肉体と天上的神的な霊魂の本質で創造されているとする。

ダビデの人間の素晴らしさへの驚きを喚起した後、『ポイマンドレス』と『アスクレピオス』のフランス語訳である『ヘルメス・トリスメギストスの二書』から、人間の霊魂と肉体の二元性を述べる箇所[11)]への言及を経て、霊魂の不思議と人体の讃美へと展開する。霊魂に関して人間がすることのできない奇跡的なことをした人として、クラゾメナエのヘルモティウス、アリステアスらの例が、欄外注に記されたように、古代ローマのコルメッラ Lucius Junius Moderatus Columella(4BC-c.70AD)の『農業論』*De Re Rustica* のコトローによるフランス語訳[12)]を主たる典拠として列挙される。神の傑作としての人体の讃美では、これも欄外注に記された、古代教父のラクタンティウス Lucius Cacilius Firmianus Lactantius (c.240-c.320)の『神の御業について』*De Optificio Dei* のジャン・ブレッシュによるフランス語訳[13)]を主に引き写しながら、頭部、眼、鼻、舌、顎などの働きに驚嘆する。

カルダーノ Gerolamo Cardano（1501−1576）が『精妙さについて』で記した、人間の顔に具わる、識別性と恋へと駆り立てる美という二つの驚嘆すべき事柄に触れた後、『ヘルメス・トリスメギスの二書』から、この度は友人デュ・プレオーの翻訳に従うと欄外注で明記して、人体の素晴らしさに驚嘆し、それを創ったのが神に他ならないとする一節を援用し、人間の本性に関する省察

---

10) *BD*, p.41<<Mais nous qui sommes Chrestiens [...] croyons qu'apès que nostre Dieu eut créé l'homme de la terre, il inspira en la face d'icelluy l'esprit de vie, et l'homme fut faict ame vivante. Et ne faut pas entendre ceste inspiration avoir esté quelque souflement, fluction, ou coulement d'une alaine, qui sortist ou procedast de la bouche de Dieu : car il est simple, sans aucune compostion ou mixtion : mais bien l'ame estre  esprit aorné de raison, et d'intellect, comme Moyse escrit en son livre de la creation du monde.>>

Cf. Théodorète de Cyr, *Theodorite evesque cyrien, De la nature de l'homme*, translaté de Grec en François par Roland Pietre, Paris, Michel de Vascosan, 1555（参照したのはリヨン市立図書館所蔵版）fol.29 r° << Et le Seigneur, dit Moyse, forma l'homme de la terre, et inspira en la face d'iceluy esprit de vie, et l'homme fut faict ame vivante. Et ne fault entendre ceste inspiration avoir esté quelque soufflement, fluxion ou coulement d'une halaine, procedente de la bouche de Dieu, veu qu'il est simple, n'ayant rien mixionné ou composé : mais bien l'ame estre esprit aorné de raison et d'intellect. Ainsi Moyse en a escrit en son livre de la fabrique de l'Univers.>>

11) *Deux livres de Mercure Trismegiste*, traduit de Grec en francoys par Gabriel du Preau, Paris, Estienne Groulleau, 1557, fol. 5r°-v°, fol.80r°-v°（参照したのは Gallica による電子版）。

12) *Les douze livres de Lucius Iunius Moderatus Columella des choses Rusticques*, traduicts de Latin en Francoys, par Claude Cotereau, Paris, Jacques Kerver, 1552（参照したのはリヨン市立図書館所蔵版）

13) Lactance, *De l'Ouvrage de Deiu*, trad. Jean Brêche, Tours, 1543.

を締めくくる。

こうして人間の本性の観想について議論した後には、人間の技芸が優れていることを示すことが残されているとして、技芸の発明者たる人間の賞讃に移る。主としてカルダーノの『精妙さについて』から例を取り、古代のアルキメデスの鏡を用いて沖合いの船を燃やす例などが挙げられ、同時代の印刷術、大砲の発明に及び、さらにレオルルド・ダヴィンチの飛行術の発明などによって、人間が火、水、空気をも征服したとまで述べられる。ここで再び『ヘルメス・トリスメギストス』の一節が援用され「自然の奇跡としての人間」が宣言される。この後モーセ、パウロ、ソクラテスなどの霊魂の奇跡の例が、コルネリウス・アグリッパ H. Cornelius Agrippa（1486-1535）の『隠秘哲学』*De Occulta philosophia*（1537）を典拠として挙げられ、さらには不可思議な節制や、毒で死なない人、超人間的視力などの特異な人間の例、さらに音楽の不思議、医薬品として役立つ人間の排泄物[14]へと、例が繰り広げられる。

この書の終りには人間の弱さへの反論が短くなされる。動物が角、爪、鉤爪、毛などの肉体の武器を備えているのに対して、人間は悟性、理性という精神の武器を持っているというものである。ここでは、ジェッリ Giovan Battista Gelli（1498-1563）の『ラ・キルケー』のドニ・ソヴァージュによるフランス語訳[15]から引いた説により、精妙で細く、生き生きとした肉がより精妙な血をつくるのに向いており、これはより精妙な精気を生み、ものごとをよりよく見出し、完全に知るための知性に好都合である、との説明が加えられる。

最後に、人間の悲惨の原因に触れ、神は人間の傲慢と不遜を打ち負かすために土で人間を創造し、人間が自分を見誤り、服従から出たために悲惨を加えられた、とする。そして全体の結論として次の主張がなされる。

「神が最初に人間を創造された状態で人間を考察したいなら、すべての被造物の最も高貴なものとして、人間において神が褒め称えられるために、宇宙の創造における神の傑作である。しかしアダムの子孫全体にまかれた全体的腐敗の状態で人間を考察するなら、汚れ、汚され、怪物的で、忌まわしく、醜悪で、数多くの不都合を免れず、至福から排除され、無能で変わりやすく偽善者にされているのを見るだろう。要するに、すべての被造物の主人である代わりに、罪の奴隷にされているのであり、その罪に生まれ懐胎されている。しかし神の言葉の不死の種により、まったく作り直されたものとして人間をその後考察するなら、最初の名誉善においてだけではなく、ずっとより偉大に再生されているのを見るだろう。というのも、罪が人間を害するために溢れかえっているところで、人間を救うために、神の恩寵はより豊富に蒔かれ溢れ、聖アンブロシウスが『異邦人への呼びかけ』第三章で、聖アウグスティヌスが『叱責と恩寵の書』で述べるように、人間を新しい創造物としたからだ。」[16]

---

[14] シモナンが *BD* の註(pp.131-132, note.131)で指摘するように、マネッティもこうした例をその人間の尊厳論の第四書で挙げていた。

[15] *La Circe de M.Giovan-Baptista Gello*, nouvellement mise en Françoys, par le Seigeur du Parc [Denis Sauvage], Lyon, Guill. Roville,　1550.（参照したのはリヨン市立図書館所蔵版）

[16] *BD*, pp.82-83<< si nous voulons considerer l’homme en l’estat auquel Dieu l’avoit premierement créé, c’est le chef

こうして三つの段階での人間の考察をなし、エルサレムへ行く備えを呼びかけて終わる。

ここまで紹介を兼ねて、ボエスチュオーの人間の尊厳論を順を追って見てきたが、この小論は一見したところ何ら構成の意図もなく展開されているようにも思える。ボエスチュオーがこの論を起草しようとしたとき、フランスでは、この主題を含む書物は既に存在したが、一貫した論として従うべき手本は、確かになかったであろう。しかし、人間の尊厳と優越を表題として掲げて、イタリアでほぼ最初にこの主題を検討したマネッティの論は、既に1532年にバーゼルで刊行されていた[17]。そして、上で見たようにボエスチュオーはいくつかの論点をそこから借りていた。ボエスチュオーは自身の論を書くにあたり、この先行する論から内容だけではなく、構成も借りているのではないだろうか。

マネッティはアラゴン王アルフォンソに献じた序文で自書の構成を明確にしていた[18]。すなわ

---

d'œuvre de Dieu en la creation de l'univers, à fin qu'il fust glorifié en luy, comme en la plus noble de toutes ses creatures. Mais si nous le considerons en l'estat de la generale corruption espandue sur toute la posterité d'Adam, nous le verrons souillé, chafouré, monstreux, hideux , difforme, subject à mille incommoditez, forbanni de beatitude, rendu impuissant, variable, hipocrite. Bref, au lieu d'estre Seigneur de toutes creatures, rendu esclave de peché, auquel il est nay et conceu. Mais si nous le voulons après considerer comme refaict tout de neuf, par la semence immortelle de la parolle de Dieu, on le verra restitué non seulement en tous se premiers honneurs et biens : mais beaucoup plus grands : car là où le peché est desbordé pour luy nuire, la grace de Dieu plus abondamment s'est espandue et derivée pour le secourir, le faisant nouvelle creature, comme S. Ambroise dict au livre de la vocation des Gentilz chap.3 et S. Augustin au livre de correption et de grace.>>この三段階での人間の考察は、マネッティにもあるが、ボエスチュオーの典拠はキュロスのテオドレトスである。Théodorète de Cyr , *op.cit*., fol. 20 v°-21 r°. <<Si nous uoulons considerer l'homme en l'estat auquel Dieu l'auoit creé premierement : l'homme est le chef d'œuuvre de Dieu en la creation de l'Vniuers, à fin que Dieu fust glorifié comme en la plus noble de toutes ses creatures. Mais si nous le uoulons considerer en l'estat de la generale corruption espandue sur toute la posterité d'Adam, nous le uerrons bien souillé & chafourré, subiect à mille incommoditez, forbanny de beatitude, rendu impuissant, ignorant, uariable & hypocrite: bref en lieu d'estre seigneur de toutes les creatures, rendu esclaue de peché, auquel il est nay & conceu. Que si on le ueult apres considerer comme refaict tout neuf, & regeneré par la semence immortelle de la parolle de Dieu, on le uerra restitué non seulement en tous ses premiers honneurs & biens, mais en beaucoup plus grands : car là où peché s'est debordé pour luy nuire, la grace de Deiu plus abondamment s'est espandue & deriuee pour le secourir, le faisant nouuelle creature. S. Ambroise au liure de la uocation des Gentilz chap.3. S. August. en son liure de la correption & de grace, au chap.10. >>

17) E. R. Leonard, Introduction au *De Dignitate et Excellentia hominis*, p.xxi, *Clarissimi viri Ianocii de Manectis, Equitis ac Iureconsuli Florentini, ad inclytum Arrogonum Regem Alfonsum, de dignitate et excellentia hominis Libri IIII*, ed. Johann Alexander Brassicanus, Andreas Cratander, Basel, 1532.

18) Giannozzo Manetti, *op.cit*., p.3.<<Totum autem opus in quatuor libros non temere et fortuito sed singulari quadam et precipua consideratione divisimus. Nam cum primo singula queque que in corpore humano ac deinde in eius anima et in tota hominis persona aliquatenus apparebant diligenter et accurate consideraremus, non iniuria visum est nobis, tum pro maiori quadam rerum tractandarum dignitate, tum etiam pro certiori et planiori omnium cognitione, singularia illa singulis libris seorsum ac sepatarim oportunius et convenientius explicare.

Quocirca in primo de egregiis dumtaxat humani corporis dotibus, in secundo de precipius quibusdam rationalis anime privilegiis, in tertio de admirabilibus totius hominis muneribus, quanto a nobis fieri potuit, diligentius et accuratius explicavimus. Que omnia cum tribus prioribus libris fecisse videremur, quartum insuper adhibere placuit, in quo ea confutaremus que a pluribus idoneis auctoribus de laudatione et bono mortis et de miseria humane vite conscripta fuisse intelligebamus, quoniam illa nostris quodammodo adversari et repugnare non ignoramus.>>（ところで、作品全体を四書に分割したのは理由なく偶然にではなく、ある独自独特の熟慮に基づいてのことです。なぜなら、人体において、ついでその霊魂において、そして人間の全人格において、幾分か明らかになっていることを初めから一つずつ勤勉に念を入れて考察しましたので、論じることのより大きな価値のために、またすべてのものより確かでより明瞭な認識のためにも、その一つ一つを個々の書で別に分けて、より適切により妥当に説明するのは、私には不当と思われません。それゆえに第一書ではただ人体の長所の優越について、第二書では理性的霊魂のある独特の特権について、第三書では人間全体の驚くべき特質に

ちマネッティは全体を四書で構成し、それぞれ人体、霊魂、人間全体、人間の悲惨の主張とそれに対する反駁を扱っている。第一書では、人体を賞賛する。人体の驚くべき生理的構造を、キケロ、ラクタンティウスを典拠として述べる。第二書では霊魂を扱い、キケロを主たる論拠として霊魂不滅を論じる。第三書は、人間の全体、すなわち人体と霊魂が組み合わされた人間そのものを扱い、人間の驚くべき特性として、人間の偉大な芸術作品、世界の美しさ、神が作った最も優れた存在である人間が検討される。つまり身体、霊魂という個別単一のものから人間全体という複合的なものへと、また身体から霊魂へと低劣なものから高貴なものへと、論は整然とした順序に従って展開される。その上で第四書は、枢機卿ロタリウスらの人間の悲惨の主張とその反駁にあてられ、前三書の順に従い、人体、霊魂、人間の全人格に対する悲惨の主張をあげ、それぞれを論駁している。

先のボエスチュオーの論の内容の概要と比べてみれば、マネッティの扱う主題やその展開の順序にボエスチュオーのものがほぼ一致していることがわかる。ただ、ボエスチュオーは主題ごとに書に分けることはおろか、章分けすら行っていないので、全体的構成が見えにくくはなっている。しかしマネッティの論を元の設計図として考えればボエスチュオーの構成はより分りやすくなり、つぎのように考えることができよう。ボエスチュオーはマネッティの論の大枠には従いながら、四書とはせずに、二部に分けている。前半は人間の本性である、人体と霊魂が扱われ、神の似姿としての人体と神の霊気としての霊魂がマネッティとキュロスのテオドレトスを論拠として主張される。『ヘルメス・トリスメギストスの二書』による人間の素晴らしさへの驚きの表明の後、魂の不思議と人体の讃美が例を挙げて行われる。もっともボエスチュオーにはマネッティほど論理展開の順序への配慮が見られず、理論面では身体、霊魂の順序であったが、例示は霊魂、身体の順序となっている。『ヘルメス・トリスメギストスの二書』から引いた人間の作者への感嘆の引用に続く後半は、人間の不思議が扱われ、論証抜きで、まず技芸の発明者としての人間の例が挙げられる。ここから後半最後の人間の排泄物の医薬的効果へと論を進めていれば、マネッティの論の構成をミニチュアとして再現したものとなっただろう。

しかしボエスチュオーはそうしなかった。『ヘルメス・トリスメギストスの二書』からの引用によって自然の奇跡としての人間の宣言がなされ、魂の奇跡や人間の身体に具わる不思議などの例が大量に付け加えられる。このようにボエスチュオーは順を追って論理を展開すると言うよりは、ヘルメスの文言を区切りの印として、前・後の二部に、さらに各部をさらに二つに分けたうえで、それぞれに豊富な例を積み上げていく構成をとる。そして後半の最後の人間の排泄物の医薬的効果の例でマネッティの論の進め方に再び接合する。論の主要部末尾に、人間の悲惨に関する反論が短く付加されているが、マネッティとは異なり、もっぱら人体の虚弱さへの反駁であり、ジェッリにその論拠を求めている。最後にマネッティにも見られる、人間の最初の状態、原罪後の状態、復活後の状態が考察され、結論とされている。

---

ついて、できるだけ、勤勉に精確に説明しました。これらすべてを先の三書で行ったと思われ、その上に第四書を付け加えるのがよいと思います。そこでは多くの才能ある著者によって、死の賞讃と善、そして人間の生の悲惨について書かれたと私が思ったことに反駁しました。これが私の書に多少反し一致しないと知らないことはないからです。)

クリステラーは既に言及した書のイタリアルネサンスにおける人間の尊厳を扱った章で、人間讃美の歴史を略述している[19]。すなわち、既に古典古代においてもギリシア神話のプロメテウス神話などに見られるような「技芸の発明者としての人間」<<man as inventor of arts>>の称賛があり、ヘルメス論者は「人間は大いなる奇跡である」<<man is a great miracle>>とし、プラトンは「人間の霊魂を物質的世界と純粋形相の超越的世界の中間に」<<the human soul in the middle between the corporeal world and the transcendent world of pure forms>>に位置づけ、ストア派は「神と人間の共同体としての宇宙」<<the universe as a community of gods and men>>を考えていた。また キリスト教思想においては、『創世記』などに、「人間の他の被造物への優越性」<<the superiority of man over other creatures>>が記され、「神の似姿に創造され救いに到達しうる被造物としての地位」<<status as a creature made in the image of God and capable of attaining salvation>>に人間の尊厳の根拠を置いていた。

こうした人間の尊厳に関する諸主題を眺めてみれば、ボエスチュオーはこうした主題をほぼそのまま取り上げていることが理解される。しかしボエスチュオーが論拠を挙げて述べたのは、神の似姿としての人間と、神の霊気としての人間の霊魂という主題だけであり、大きな奇跡としての人間というヘルメス的主題は、『ヘルメス・トリスメギストスの二書』のフランス語の翻訳を引き写す形で提示された。ラクタンティウスの書にヘルメス文書との接点が見られることなどから分るように、ヘルメス思想はキリスト教思想と親近性を持つ部分があり、ボエスチュオーの人間の尊厳論は、結論からしても、まったくキリスト教的なものと考えられる。

クリステラーは先の人間讃美の伝統に続いて、イタリアルネサンスにおける人間の尊厳論の発展を記している。そこで指摘される、フィチーノの神や天使と物質の中間者としての中心をしめる人間の霊魂[20]や、ピコ、さらにボヴェルの主張する人間の自由[21]、などのようなルネサンス期にまさに相応しい主題は、ボエスチュオーにはまったく無縁である。「本質的には古代ーストア的思想圏に立ち返っている」[22]とされるマネッティですら、ルネサンス期の思潮を踏まえてであろうか、五感による快楽の存在を認め、それで楽しむとしていた[23]。ボエスチュオーの論は、16世紀フランスで人間の尊厳を表題に掲げて扱った論としては初めてのものと思われるが、そこで扱われる主題に関しては、何ら新しい展開を認めることはできず、ボエスチュオーの特徴もそこにはない。

先にボエスチュオーがマネッティの論から大枠としての構成を借りたことを指摘した。実は、

---

[19] Kristeller, *op.cit.*, pp.169-170.

[20] Kristeller, *op.cit.*, p.173.

[21] ピコについては、Kristeller, *op.cit.*, p.175-176.。ボヴェルについては、E.カッシーラー、『個と宇宙　ールネサンス精神史ー』、薗田坦訳、名古屋大学出版会、1991、112−113 頁。

[22] E.カッシーラー、前掲書、103 頁。

[23] Manetti, *op.cit.*, p.114<<Quippe singulis exterioribus videndi, audiendi, olfaciendi, gustandi, et tangendi sensibus tantas semper et tam vehementes voluptates capit>>（実際、見る、聴く、嗅ぐ、味わう、触れるという個々の外的感覚により〔人間は〕いつも大きくとても強い快楽を感じる） ;p.116<<At cum modice ac mediocriter his [=videre et audire] et huiusmodi sensibus utimur, non modo neque fatiscimus neque laboramus sed potius refocillamur, gestimus, et gaudemus.>>（しかし私たちがこれらとそのような感覚をほどよく適切に用いるときは、単に疲れもせず苦労もしないばかりか、むしろ活力を回復し、大いに喜び、楽しむ。）

マネッティはキケロなどからの引用を論拠として頻繁に大量に持ち出しているが、ボエスチュオーもこれに倣ったのか、多くの例を挙げているのは、内容の概要で見た通りである。否むしろ「他の哲学論よりも、著名な幾人ものより多くの記憶すべき例と英雄的事跡で飾った論」にとって、例こそが主要部をなすと言っても過言でない。恰も例示によって説得するかのようだが、こうした例にこそボエスチュオーの論の特色を求めるべきであろう。

校訂本でのシモナンの注釈によれば、ボエスチュオーが論の中で典拠としたのは、マネッティの『人間の尊厳と優越について』、キュロスのテオドレトスの『人間の本性について』のロラン・ピエートルによるフランス語訳、『ヘルメス・トリスメギストスの二書』のガブリエル・デュ・プレオーによるフランス語訳、ジェッリの『ラ・キルケ』のドニ・ソヴァージュによるフランス語訳、ラクタンティウス『神の御業について』のジャン・ブレッシュによるフランス語訳、カルダーノの『精妙さについて』のリシャール・ル・ブランによるフランス語訳、コルネリウス・アグリッパの『隠秘哲学』、コルメッラの『農業論』のクロード・コトローによるフランス語訳、メヒア Pero Mexia（1497−1551）の『様々な教訓の森』*Silva de varia lección*（1540）のクロード・グルジェによるフランス語訳[24]などである。

このうちマネッティ、テオドレトス、ヘルメス、ジェッリのものは、理論的な支えに用いられ、その他の著書には例を求めている。後者については大まかな傾向が見られ、前半の魂の不思議の例はコルメッラから、人体称賛の例はラクタンティウスから、後半の技芸の例はカルダーノから、魂の奇跡の例はアグリッパから、とそれぞれの主題についてまとまって一つの著作を集中的に利用している。このうち特に興味深いのはカルダーノとアグリッパからのものである。なぜならコルメッラとラクタンティウスは古代の作家であり、必然的にその例も古代のものであるが、カルダーノとアグリッパは同時代人であり、当代の例も含んでいて、これはマネッティなどが利用できなかった新しい例であるからだ。ボエスチュオーは明らかにアグリッパの『隠秘哲学』から例をとっているが、おそらく著作の悪名ゆえに、その名を著作の中に挙げていない。カルダーノは「ジェローラモ・カルダーノは、信頼のできる人で、すべての教義と博識を成し遂げた」[25]と本文中に言及され、『精妙さについて』のフランス語訳からしばしばそのまま例が引き写されている。したがってここではカルダーノからの例の取り上げ方にボエスチュオーの特徴を探ってみよう。

先ほどのカルダーノの紹介に続いて、ボエスチュオーはカルダーノが次のような見聞を証言したと言う。

「ある人がミラノでみんなの前で、最初に何か他の水で顔を洗ったあと、溶けた鉛で顔と手を洗った。」[26]

---

[24] *Les Diverses leçons de Pierre Messie*, mises de castillan en françois par Claude Gruget, Paris, V. Sertenas, 1556.
[25] *BD*, p.64.<<Hierome Cardan, homme digne de foy, et consommé en toute doctrine et erudition>>.
[26] *BD*, p.64.<<un homme publiquement à Milan lavoit sa face et ses mains de plomb fondu, l'ayant premierement lavée de quelque aurtre eau>>.

このことは確かにカルダーノ自身が『精妙さについて』で語っているところで、ル・ブランによるフランス語では次のようになっていた。

「私がこれを書いていたとき、だれかある人がミラノで溶けた鉛で手と顔を洗った。しかし最初にこの人はそれらを少し何らかの水で洗った」。[27)]

カルダーノの文では先に洗ったのは手と顔であるともとれるのに対して、ボエスチュオーの文では過去分詞の一致から、先に洗ったのは顔だけだと考えられるが、その点を除いて二つの文はほぼ同じである。シモナンは校訂版の註でこの部分しか引用していないが、カルダーノの文は次のように続いていた。

「しかしそれを扱うのにこの人が二つの助力を用いたことを考慮せねばならない。すなわち素早さと水だ。水は非常に冷たく、知られていない強い効能を持っていたはずであった。それでこの水は鉛の熱さを退け、身体にくっつき粘着しないようにした。粘着性と遅効性のために、これはすべりひゆとやまあいの汁だと言う人たちがいる。時にこの水を少量使い、その結果しばしば顔が傷つけられるのを見て、私はこの水はむしろ、アンチモンのような、金属性のものであると考えた。この男は大いに稼いでおり、この芸当をやるごとに、一エキュを下回ることはなかった。それでその水が非常に廉価な草から作られていたなら、これほど部分的に使うはずはなかった。」[28)]

医師であり、優れた数学的業績をも残したカルダーノは、占星術を信じる人でもあった。16世紀の百科全書とも言うべき主著『精妙さについて』は、動植物鉱物から火山稲妻などの自然現象、人間の諸発明、霊的存在、神、宇宙までを論じている。様々な超自然的なことにも魅了されるこのルネサンス人には一種の実証主義があることをマルゴランは指摘した[29)]。カルダーノ自身も『わが生涯』の第47章で自分の認識の仕方に関して述べたおり、感覚による観察を第一に挙げていた[30)]。

---

27) Gerolamo Cardano, *De la Subtilité*, f.127 v°.<<Lors que i'escriuoit ceci, quelque homme publiquement à Milan lauoit ses mains & sa face de plom fondu : mais premierement ils les lauoit de quelque eau.>>

28) *Ibid.*<<Il faut considerer en ceci, qu'il vsoit de deux aides en le maniant, sauoir est, de celerité & d'eau. Il falloit que l'eau fut grandement froide, & qu'elle eut vne vertu obscure & crasse, par laquelle elle reietoit la chaleur du plom, & empeschoit qu'elle ne tint & adherast au cors. Aucuns disent ceci estre fait du suc de pourpié & de mercurial, pour cause de la glutinosité & lenteur. Voiant qu'aucunefois il vsoit petitement de ceste eau, en sorte que souuent il permettoit sa face estre blessee, i'ai estimé que plustost cette eau estoit mettalique, comme du stibium. Il gaignoit beaucoup. & à chaque fois qu'il faisoit ce tour, il ne cueilloit moins d'vn ecu : & si son eau estoit faite d'herbes de tant vil pris, il ne deuoit en vser tant partialement.>>

29) Jean-Claude Margolin, *Philosophies de la Renaissance*, Paradigme, ©1998, p.253. <<en tant qu'homme de métier, médeicn et inventeur, qui manipule des objets matériels et leur applique des instruments, qui palpe des organes malades et leur applique des médicaments, une sorte de positivisme fait partie de sa pratique journalière ;>>

30) << Est ergo cognitio triplex, a sensibus per obseruationes multarum rerum, quam plebs & imperitii in me magnifaciunt;>>（それゆえ知識は三重であり、〔第一は〕感覚による観察で多くのことを知るが、平民や無学な人はこれで私を重んじる）Hironymi Cardani *De propria vita liber*, Amstelaedami, Apud Joannem

それゆえカルダーノは溶けた鉛で顔を洗う男を実際に目にして、この男がこの見世物を行う前に何らかの水で予め顔と手を洗うことを観察し、この水が鉛の熱さを妨げると推測する。また男が少ししかこの水をつけずに、傷を負ったことがあったことを想起してこの水は高価であろうと推理し、またこの水が粘着性と遅効性を持つことも考え合わせて、この水の正体を推定する。このようにまったく不思議と思われることでも、多くの場合カルダーノは説明を試みる。

こうしたカルダーノの姿勢は、ボエスチュオーが挙げた他の例の場合にも当てはまる。アルキメデスが沖合いの船を鏡で燃やした件や、鮮明な像と不鮮明な像を同時に映し出す鏡の例では、パラボラの図と合わせ鏡の図をも提示して、一見したところ驚くべき現象を「科学的に」説明する。さらにボエスチュオーの記述では、レオナルド・ダヴィンチは飛行術に成功したかのように読めるが、カルダーノははっきりと失敗したと書いていた[31)]。

こうしたカルダーノの「実証主義」に対して、ボエスチュオーの態度はどうであろうか。鉛で顔を洗う男の話をカルダーノの『精妙さについて』のフランス語訳で読めば、上記のカルダーノの説明も目にしたはずである。しかるにボエスチュオーは先の引用を次のように続けていた。

「非常に柔らかく繊細な肉体を、とても熱い金属の猛威に、抵抗し曝して苦痛を感じないのはどんな奇跡なのか。」[32)]

ボエスチュオーは何ら説明を行わず、すぐに奇跡に繰り入れている。このようにカルダーノなどの典拠は驚異の例としてのみ取り上げ、その合理的科学的原因に思いを凝らすことはまるでなく、それどころか時には事例を誇張し、改変して、驚異性を強調することすら行う。この振る舞いの目的は、読者に驚きを与えることであり、シモナンはボエスチュオーは驚きを強いると表現した[33)]。

ボエスチュオーの『人間の優越と尊厳に関する小論』は、マネッティの『人間の尊厳と優越について』とタイトルがほぼ共通することからも窺えるように、このイタリア人の論を下敷きにして構成されている。ボエスチュオーがそこで扱う主題は、古代から伝統的に論じられてきたものであり、ボエスチュオーの人間の尊厳論は古代教父とヘルメス文書を理論的主柱としたキリスト教的なものである。この点で、人間の尊厳論の16世紀における展開の上では、ほとんど新しいものはなく、フランスで初めてまとまった論を書いたという以上の貢献はない。しかしボエスチュオーはこの論に、カルダーノなどから借りた新たな例を幾つも付け加えており、むしろこうした

---

Ravesteinium, 1654, p.190（参照したのはローザンヌ大学図書館所蔵版）

31) Gerolamo Cardano, *De la Subtilité*, f.321v°-322r°.<<l'inuention de voler, dont il est mal pris à deux qui tentoient nagueres de ce faire : Leonard Vincius, duquel i'ai parlé, s'est efforcé de voler, mais en vain :>>

32) *BD*, p.64.<Quel miracle est ce là de se rendre impassible et resister et exposer sa chair, qui est si tendre et delicate, contre la fureur d'un metail, qui est si chaut?>>

33) M.Simonin, Introduction au *Bref Discours de l'Excellence et Dignité de l'Homme*, Édition critique par Michel Simonin, Droz, 1982,　p.20. << le *Bref Discours* nous contraint à nous *étonner* devant quelques échantillons de notre <suffisance>. >>

例示によって説得するかのようである。こうした例の原因をボエスチュオーが説明することはまだなく、不可思議、奇跡として提示し、「驚き」の系列の語彙[34]を頻繁に用いて、読者を驚くように仕向ける。またこうした驚くべき事例は、この論の段階では、ただ人間の尊厳を示す例として提示されるだけであり、『驚倒すべき物語』での「驚異」について、セアールが示した、「稀少性」rareté によって印づけられる「驚異」prodige が世界での神の存在を知らせる、という理解[35]には、いまだ達していない。それゆえ、この点で、この小論はボエスチュオー作品の進展を把握する上では価値があると思われる。

---

[34] 次のような語彙であり、『人間の優越と尊厳に関する小論』本文での頻度を括弧内に示す。「驚き」s'estonner (1) ; 「感嘆」admiration (4), admirable(12), admirer(2) ;「驚嘆」merveille(2), merveillleux(6), s'esmerveiller(8), esmerveillé(3), esmerveillable(1);「驚倒」espouvanter(3);「奇跡」miracle(7), miraculeux(5).

[35] Jean Céard, *La nature et les prodiges*, Droz, 1996, 2e édition, p.256. << la rareté signale avec une singulière netteté la présence intime de Dieu dans le monde ;>>

# Étude de Pierre Boaistuau

## (2) *Bref Discours de l'Excellence et Dignité de l'Homme*

Yoshihiro KAJI

Le *Bref Discours de l'Excellence et Dignité de l'Homme* est le troisième livre de Pierre Boaistuau, publié à la suite de son deuxième livre, le *Théâtre du monde*, en la même année 1558 et avec le même privilège, pour <<degouster quelque peu des miseres de l'homme, lesquelles>> il a <<traicté d'un stile trop tragique>> dans celui-ci. Cet opuscule doit son plan général au *De Dignitate et Excellentia hominis* de Manetti. L'auteur reprend les thèmes sur la dignité de l'homme, qui sont déjà discutés dans les livres de Manetti et des autrtes, mais il n'y ajoute aucun aspect nouveau. Pour illustrer son argument, il <<enrichit>> souvent son traité d'<<exemples memorables>> de divers livres, et calque quelquefois ces textes. Il faut trouver un trait de cette œuvre dans la manière dont l'auteur emprunte ces exemples. Nous le recherchons dans le cas où il fait des emprunts aux passages de la traduction française de *De la Subtilité* de Cardan.